

# シニア世代が地域の子どもたちを育てる

## 「感性」を鍛えるIQNOH 教室

NPO エガリテ大手前は、5～10歳くらいの子どもの対象とする新しい教育方法を打ち出した。学童クラブなどをその実施場所とし、地域のシニア世代が先生となる。これにより、中高年の社会参画を図るとともに、「子どもたちを地域で育てる」流れをつくるのが狙いだ。その全国で初めての講習と実践の様子を取材した。

文・写真 編集部

### 眠っている中高年の力を地域の子育てに役立てる

2014（平成26）年7月15日、千葉県浦安市にある日の出公民館に、地域活動、子育てに関心を持つ男女7人が、「IQNOH（イックノー）」という新しい教育方法の講習を受けるために集った。

IQNOHとは、人間の情動に深く関わる大脳辺縁系の成長が止まってしまいう10歳ごろまでの間に「感性」を鍛えるというもの。この教育方法を提案するNPOエガリテ大手前（以下、エガリテ）は、「健全な「感性」が育成されてこそ、健全な「知性」が身に付き、健やかで安定した人間が形成される」と考えている。

また、この教育方法でもう1つ特徴的なのは、シニア世代（主として定年退職後の中高年男女）を師範（先生）とし、学童クラブなど自治体が運営す

る社会福祉施設を教育の場とする点。2日間の講習を受けて師範資格を取得した人なら、誰でも師範になれる。青少年教育の問題についてさまざまな議論がなされ、学校・家庭・地域などの、あらゆる人が子どもたちの教育に日常的に関わることが求められている中、「IQNOH教室」を新たな教育の場



親指を中に入れて握り、脳についてイメージする参加者たち

世代間交流の場とすることを目的としている。

そのIQNOHとは、どのような理論から成り立つものなのだろう。

### 子どもの脳の成長と現代教育のミスマッチ

エガリテ代表の古久保俊嗣さんは、最初に師範講習の参加者に向かつて、「どうして子どもたちのところに覚えた歌や友達の名前は忘れないのに、昨日食べたものを忘れてしまうのでしょうか」という疑問を投げ掛けた。確かに、最近覚えたはずの芸能人の名前はすぐに思い出せなくても、小学生のころに暗誦した詩などは、スラスラと口から出てくるといふ人は多いのではないだろうか。古久保さんはその理由について「子どもと大人では記憶された経路が違うため」だとし、次のように解説する。

それは、脳の発達に大きく関係している。両手の親指を中に入れて握りこぶしを作り、これを2つ合わせると大脳の形になり、大きさもこれと同じくらいだという。2本の親指の部分は「大脳辺縁系」（以下、「感性」の脳）で、猿人・原人にもあるもの。その他の指の部分は、「大脳皮質」（以下、「知性」の脳）で、人間にしかない固有の脳。この「感性」の脳と「知性」の脳の動きがうまく連動していると、覚えたことを忘れないという。

「感性」の脳の成長が止まる10歳ごろに、「知性」の脳が成長を始める。例えば、「感性」の脳しか動いていないときに、意味が分からないまま詩などを丸暗記する。それからしばらくして「知性」の脳が成長を始めると、人からいろいろ話を聞いたたり自分で調べたりするようになり、「なるほど、そういう意味だったのか」と理解する。「こうして覚えたことが血肉となって体に染み込む。これが教育です」（古

久保さん)

そうなる、まだ「知性」の脳が眠っているところから受験勉強に打ち込むことが、子どもの成長にとってよいことなのかという疑問も生まれてくる。古久保さんは、この脳の成長と現代のお受験の状況について、「現代教育のミスマッチ」と呼び、感性を思い切り鍛えてあげられるタイミングを逃していると考えている。

「子どもたちが無駄に成長期を失わないようにしてあげるのが、このIQNOHなんです」(古久保さん)

また古久保さんは、誰でも師範になれる理由について、こう説明する。

「子どもたちに何かを教えるときに最も困るのは、質問されて答えられないときです。でも、答えてはいけません。教えた「知性」の脳を刺激してしまうので、『まだ早い、いずれ分かる時がくる』と、偉そうに言うんです。偉そうであればあるほど、年を

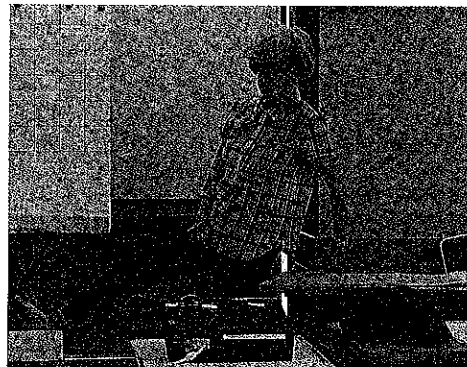
取つていければいるほどいいんです。子どもは、『聞いちゃいけないんだ』と思うわけです」

**感動と興奮、愛情のシャワーで感性を刺激**

では、具体的にどのような方法で子どもの感性を鍛えるのだろうか。エガリテ理事の三浦優子さんの講義を聞いた。

IQNOHは、大きく分けて、「1. 体を動かすエクササイズ」「2. 習慣・作法のエクササイズ」「3. 心を動かすエクササイズ」「4. その他」で構成されている(表1)。このプログラムは、エガリテのメンバー(シニア世代)が、子ども時代を振り返り、「あのころに身に付けておけばよかったな」と、常々思っていたことに基づいて作成されている。

「1. 体を動かすエクササイズ」では、発声、笑顔・表情、姿勢などについて



「姿勢のコントロールには足の指の力も大切」と説明する三浦優子さん

指導。「呼吸筋」や「吸気筋」をバランスよく使って発声することや、「体幹筋」を鍛えて正しい姿勢を身に付ける、「表情筋」をしつかりと動かして豊かな表情を作るトレーニングをする。言葉をクリアに発声することにより、相手に意思を伝達しやすくなり、相手とのコミュニケーションがうまく図れると自信につながる。また、表情筋を使うウイंकは10歳ごろまでに身

表1 「IQNOH教室」のプログラム

1. 体を動かすエクササイズ	
1) 呼吸・発声	IQNOH 体操< I > 口体操 息づかい 早口言葉 あいさつジェスチャー
2) 笑顔・表情	IQNOH 体操< II > 口・目・舌 表情 顔面言語 顔じゃんけん 応援団
3) 姿勢	姿勢確認 姿勢記憶 重心ゲーム IQNOH 体操< III >
4) 運動視力	動体視力 瞬間視 周辺視野
2. 習慣・作法のエクササイズ	
1) あいさつ	あいさついろいろ アイコンタクト
2) 食事のマナー	箸の持ち方 箸ゲーム 茶碗の持ち方 食事の仕方
3. 心を動かすエクササイズ	
1) 想像力	のぞき穴ゲーム 袋の中はなに？
2) 創造力	創作リレー童話 紙芝居
3) 洞察・共感	伝言文字、伝言リズム ジェスチャーゲーム、 連想ゲーム
4. その他	
1) 素読	

に付けないと、なかなかできるようにならないのだという。

「2. 習慣・作法のエクササイズ」では、人と触れ合って社会で生きていくために身に付けておかなければならない、あいさつや食事のマナーを指導。「お父さん、お母さんは仕事で忙しくて子どもに関わる時間が少ない。だから今こそ、祖父母世代と孫世代のつながりやを強化して、日本の昔ながらの習慣や作法などの、世界に誇れる文化を

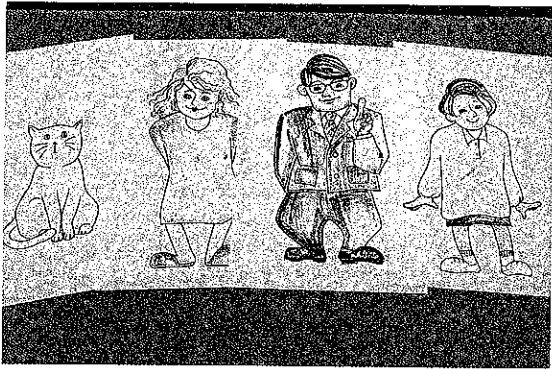
しつかり継承していくことが大事だと思っています」(三浦さん)

「3. 心を動かすエクササイズ」は、IQNOHの中で最も重要なプログラムとされている。

「昔のように、みんながだいたい同じような価値観で『善い』『悪い』を決めていた時代と違って、現代のようにいろいろな考え方の人がいる中で子どもたちが生きていくためには、相手が何を考えているのかを、その表情や雰

囲気から見極める洞察力と、自分と異なる人とどうにか合意を成立させて一緒に生きていくために必要な『共感力』が非常に求められてくると思うんです。そのあたりのところをエクササイズしようと思っています」(三浦さん)

「4. その他」では、主に素読を行う。教材集の中から、「枕草子」などの古典を1つ選び、数行ずつ子どもたち全員に朗読させる。これを何回も繰り返すと、子どもたちは自然に暗誦するよ



教材の一部。人物のイラストを見ながらストーリーを組み立てる「創作リレー童話」に使用する

ける「職場」をつくり、活動しやすい形にすることだ。「継続的に行うことで有益な活動になっていくんです。一発勝負、または一発芸で、有益だっというのはめったにありません。『継続は力なり』で、ずっとやり続けること。これが価値を生み出して力になって有益になるんです」(古久保さん)

また、テキストや教材を用意してい



ゲームをしながら箸の持ち方を教わっている子どもたち

うになるのだという。遊びを取り入れたこれらのエクササイズによって、子どもにも感動と興奮を与えるとともに、愛情のシャワーを浴びせることも大変重要だという。感性の脳は安定した感覚の中で育まれるため、子どもたちに「自分は守られ

ている、安心だ」と、穏やかな気持ちにさせることが大事だからだ。そのため師範には、子どもたちにさまざまな形で愛情を表現することを勧めている。

### 実践で覚えてきた課題

講習を終えた7人の師範たちは、持ち回りで「IONH教室」を実践する。8月5日は3人の師範が担当し、日の出公民館に集った近隣に住む6〜10歳の17人の子どもたちを対象に開催された。

この日に師範たちが用意したプログラムは、姿勢、箸の持ち方を教えるものや、創造力を伸ばす紙芝居を用いたもの。最初は恥ずかしがっていたり、戸惑っていたりしていた子どもも、次第にみんなの緊張がほぐれていき、笑い声も聞かれるようになった。場面場面で、子どもたちが集中している様

子や、飽きている様子などがうかがえ、実際の反応を見ることができた。

実践を終えた師範たちは、「人数が多いときは、順番を待たなくてはいけないものより、ゲームの方が飽きずに盛り上がるね」「最初は体操を取り入れて、まず子どもたちの緊張をほぐした方がいいかも」「左利きの子にはどのように指導したらよいか」「最近はお茶碗とお箸はあまり使わず、お皿とフォークやスプーンの方を使う子どもが多いみたいね」などと、感想や今後の課題を共有していた。

### 継続的に活動することによって有益な取り組みとなる

今後エガリテは、自治体と手を組んで、自治体が主催しエガリテが協力するという形で、「IONH教室」を全国的に広めていく予定だ。

そのために、エガリテが最も大切だと考えているのは、師範が継続的に働ける。この教材はこういうふうに使わなければならない」というような決まりは全くなく、テキスト(マニュアル)に縛られず、地域性や子どもたちの状況に応じて師範がアレンジし、自由に展開していくことを望んでいる。古久保さんは、「スマートフォンなどのように、マニュアルがなくても、『いじっていたら分かるでしょ』という形の形にしようという意識をもってIONHを企画してきました」と話す。全国に先駆けて「IONH教室」の師範講習・実践を行った日の出公民館は、師範に「地域の子育てを支援する担い手になっていただきたい」と期待を寄せている。今後は、近隣の児童育成クラブとの協働事業として、「IONH教室」を定期的に開催していく予定だ。



NPO エガリテ 大手前代表の古久保俊嗣さん